

訳語・混淆語句成立過程の考察

目次

- I、まえがき
- II、訳語・混淆語句成立過程の研究
- III、訳語・混淆語句成立過程の調査
- IV、まとめ

橋本貞雄

## I、まえがき

日本語における外国語の借用形式は一定していないといえる。外国語をそのままのスペリングで取り入れることもあるし、翻訳語を与えたりあるいは混淆語句の場合もある。

本考察では、英語が翻訳語あるいは混淆語句として定着していく過程を考察している。

調査方法としては、現在最も頻度が高いと思われる翻訳語と混淆語句を時系列にとらえるために新聞記事（『朝日新聞』<sup>(1)</sup>）、自由国民社『現代用語の基礎知識』（以後、『基礎知識』発行年<sup>(2)</sup>）を調査対象とした。

## II、翻訳語・混淆語句成立過程の研究

翻訳語成立過程の研究としては柳谷章『翻訳語成立事情』<sup>(3)</sup>がある。この中では社会、個人、近代、美、恋愛、存在、自然、権利、自由、彼女の10項目が扱われている。

これらの翻訳語の社会背景、文学作品中での定着過程が扱われているが、変化過程を時系列でとらえての手法ではない。

また、翻訳語が使われていくうちに形が変化し、概念もまた変化していく過程は扱われていない。

本考察は、assessment、summit、round、accessの4語を調査対象とした。

### III、翻訳語・混淆語句形成過程の調査

#### A' Assessment

##### 1' Assessment の定義

Assessment は動詞 assess から派生した名詞である。

動詞としての意味内容を *The American Heritage Dictionary* 1983 Paperback 版 (以下、AHD) (p.41) は次のように定義している。

assess 1. To evaluate, esp. for taxation. 2. To set the amount of (e.g. a tax). 3. To charge with a tax, fine, etc.

[1、特に課税の目的で評価する。2、(例えば、税を) 査定する。4、税、罰金などを課する。] AHD の定義によれば、assess は課税評価が本来の意味である。

この語が、環境汚染が社会問題化すると同時に術語として定着するようになった。

Assessment が「アセスメント (環境事前調査、影響評価)」としてマスコミで扱われるようになったのは昭和40年代末からである。

『昭和49年版環境白書』の中でも「開発と環境アセスメント」(p.19) をとりあげている。

Assessment が「環境事前調査」と「環境影響評価」として定着して行く過程は、『基礎知識』の中での扱い方にも表れている。

2、『基礎知識』における定着過程

a、『基礎知識』1981年版

「新語話題コーナー」(p.45)で取り上げられているが、entry word (本文見出語)ではない。

また、新語としての見出しの扱いは「環境アセスメント (Environmental Assessment 環境事前調査、影響評価)」となっている。

この配列は当該語の定義過程において変化して行く点も注目される。

b、『基礎知識』1985年版

この版から entry word (p.128)としての扱いを受けている。

「新語話題コーナー」という名称も「最新重要語コラム」と改称されている点も同書の編集方針の変化として興味深い。

「基礎知識コーナー」と同じ配列で「環境アセスメント (Environmental Assessment 環境事前調査、影響評価)」となっている。

c、『基礎知識』1988年版

この版から見出し項目の配列が変わっている。

「環境アセスメント (環境事前調査／影響評価 Environmental Assessment)」(p.378)となり、概念の基となっ

た英語を日本語の後にしている。

d、新聞記事での扱い方

新聞(『朝日新聞』)では記事構成上の制約、読者に対する視覚的効果等の理由でか、かなり自由な表記をおこなっている。特に、1990年後半に「環境アセスメント」関連調事が目立っている。

環境影響(アセスメント)	10	13	1990
環境アセスメント	11	15	1990
環境アセス	11	15	1990
環境評価	12	22	1990
環境予測	12	22	1990
環境アセスメント(環境影響評価)	11	26	1990

「環境評価」、「環境予測」のように仮名書き「アセスメント」抜きで使用されているこれは訳語が確立しつつあることを示すものといえよう。

3、混淆語句としての Assessment

「事前調査」、「評価」という2つの概念をもたせた assessment と環境とを組み合わせた「環境アセスメント」は漢字と英語の混淆語句である。

この「環境アセスメント」が他の漢字と組み合わせられて新しい混淆語句を形成し始めている。

a、技術アセスメント

1970年代に注目された「テクノロジー・アセスメント」という概念がある。

47年から『公害白書』は『環境白書』と改名された。48年には環境庁企画整展編『図でみる環境白書昭和48年版』が刊行され、その中で「テクノロジー・サセスメント」(p.96)は詳しく解説が加えられている。

その要点は、新技術導入による影響を社会的に検討する必要性の主張である。『白書』の発表後「技術の事前評価(テクノロジー・アセスメント、TA)」という言葉が新聞記事でも使われ始めている。

このTAは、実は『基礎知識』においては1973年版巻末「外来語・略語」(p.128)中で「TA制度」として採録され1991年版にいたっている。

しかし、1991年版まで entry word としては取り上げられていない。

一方、平成2年10月から平成3年5月までの間に『朝日新聞』より採録されたのは延べ5例であった。

テクノロジー・アセスメント 10 / 30 / 1990

技術アセス 10 / 30 / 1990

12 / 18 / 1990

1 / 8 / 1991

テクノロジー・アセスメント 1 / 8 / 1991

b、科学の社会的アセスメント

『基礎知識』(1991)には収録されていないが、『朝日現代用語知恵蔵』(1990)にはすでに entry word となっている。

環境アセスメントに始まり、技術アセスメント、社会アセスメントと定着し始めているといえよう。

B' Summit

1' Summit (サミット) の新定義

Summit は元来「(山などの) 最高点、(成就・願望の) 極限〔頂点〕」を意味したが、主要先進国首脳会議(『基礎知識』)として新しい概念をもつようになった。

サミットは1975年にフランスの当時の大統領ジスカールデスタンの提案によりランブイエで第1回会議が開催された。

Summit conference の基底語となっていた conference を喪失し、その概念を summit に転移している。概念転移の好例といえよう。

2、サミットと開催地名との混淆語句

第1回目ランブイエ・サミット以来開催地名との組み合わせによる混淆語句形成が定着している。

この地名との組み合わせによる混淆現象は歴史上の出来事の名称として古くから好まれてきた語形成法である。

「ウイーン会議」(1914-1815)、「パリ平和会議」(1919)、「ヴェルサイユ条約」(1919)、「フシントン会議」(1921)、「ポツダム会談」(1945)等開催地名との組み合わせによる混淆語句である。

## C' Round

### 1' Round の定義

AHD は和語 Round を次のように定義している (pp.598-599).

round n. 1. Something round, as a circle, disk, glove, or ring. 2. A cut of beef between the rump and shank. 3. A complete course, succession, or series: a round of parties. 4. Often rounds. A course of customary or prescribed action, duties, or places. 6. A single outburst of applause. 7. a. A single shot or volley. b. Ammunition for single shot; a cartridge. 8. A period of play or action in various sports. 9. Mus. A musical form in which the same melody is repeated by successive overlapping voices.

定義 3. A complete course, succession, or series 「全コース、連続したもの、(同種類・類似したもの)の連続」が GATT における Round の用法である。

Round が最初に使われたのは 1967 年に妥結された Kennedy 提唱による Negotiations for a Linear Tariff Reduction (関税一括引き下げ交渉) の別称 Kennedy Round においてである。

その後 New International Round (新国際ラウンド) が東京で 1973 年に開催された別称東京ラウンド



である。

この時点で round は multilateral（他国間、多角的）という connotation をもつようになった。更に、1989年 New Round (Multilateral Trade Negotiations) が Uruguay で開催され、Uruguay Round と別称されている。

Uruguay Round の継続討議が Brussel で開催されたが不調に終わった。最終期限であった1990年12月を過ぎ、国際政治の焦点になりかかったが、イラクのクウェート侵攻による湾岸危機によりマスコミでの扱いは二次的になっていた。

しかし、記事は小さいが確実に新聞等マスコミでこの Uruguay Round を報じてきている。本考察で論じるのは、Uruguay Round の訳語とその扱い方である。

同一新聞においても一定していない。本考察では『朝日新聞』の記事での扱い方を調査した。

英語では the Uruguay Round of trade negotiations under the General Agreement on Tariffs and Trade (GATT), the Uruguay Round of the General Agreement on Tariffs and Trade, the Uruguay Round of GATT trade talks<sup>(4)</sup> などが一般的表現である。

一方、日本語では7種類の表現が混在していた。

- ① 関税貿易一般協定（ガット）の新多角的貿易交渉（ウルグアイ・ラウンド）
- ② 関税貿易一般協定（ガット）のウルグアイ・ラウンド（新多角的貿易交渉）
- ③ 関税貿易一般協定（ガット）・ウルグアイ・ラウンド（新多角的貿易交渉）

- ④ ウルグアイ・ラウンド (新多角的貿易交渉)
  - ⑤ 新多角的貿易交渉 (ウルグアイ・ラウンド)
  - ⑥ ウルグアイ・ラウンド
  - ⑦ ウルグアイ・ラウンド (ガットの 新多角的貿易交渉)
- 7つの構造は4つの constituent の組み合わせである。

- A || GATT (ガット)
- B || 関税貿易一般協定
- C || Uruguay・Round (ウルグアイ・ラウンド)
- D || 新多角的貿易交渉

4つの constituent の組み合わせの可能性として、次の6通りが考えられる。(AとCは片仮名書きを使用する。)

	組み合わせ形成	調査件数の分布
(1)	A + B + C + D	19
(2)	A + B + D + C	31
(3)	B + A + C + D	0
(4)	B + A + D + C	0

(5) A + C + B + D  
 (6) B + D + A + C

0 0

(3)、(4)、(5)、(6)の例はないが、変形として次の形式がある。

ガットのウルグアイ・ラウンド (新多角的貿易交渉)

10

関税貿易一般協定 (ガット) ウルグアイ・ラウンド

1

(5)と(6)の採集例はないが、他の4例より形が整っている。

(5) ガット・ウルグアイ・ラウンド (関税貿易一般協定・新多角的貿易交渉)

(6) 関税貿易一般協定・新多角的貿易交渉 (ガット・ウルグアイ・ラウンド)

固有名詞との組み合わせによる表現は、親しみと記憶し易さの点で優れている、といえよう。

また、日本語の表記上からいえば、原語を先にして日本語を後に付けて注とする方が合理的であるように思える。

いずれにせよ、Roundは『多国間・多角的交渉』という新しい意味をもって定着の過程にある。

#### 1、アクセス

この単語本来の定義（くへ近付く方法〔手段〕）をアクセスとして使用している。巨大都市の複雑な道路網の中で目的地への最適到達手段を、コンピュータにおけるアクセスとのアナロジーとして使用され始めたと推測される。

#### 2、参入

貿易摩擦対策としてとられた1987年の緊急経済対策の11項目でアクセス（参入）という概念が導入された。これを機に一般化したといえる。

#### 3、ミニマムアクセス

訳語の確立していないこの用法は1990年代後半から新聞に出るようになった。書記法としても、ミニマムアクセスとミニマム・アクセスとが混用されている。ミニマムアクセス（最低輸入量）に定着しつつある。

### IV、まとめ

翻訳語・混淆語句成立の過程で注目されるのは言語出処の性質の違いによる点である。また、日英語語法の違いが概念構成において重要な役割を果たしている。

A' Assessment の場合

中央公害対策審議会環境影響評価小委員会のような公的機関名あるいはそこから発行される報告書の翻訳語である。

この場合には公用語としてすでに確立されているといえる。

しかし、マスコミ用語としては新鮮な響きをもつアセスメントの方が視聴覚的效果がある。さらに、「アセ条例」、「技術アセス」のように portmanteau word (カバン語) 化も容易である。

B' GATT と Round の場合

GATT (General Agreement on Tariffs and Trade) は公式略称である。

一方、round は米国マスコミ用語であり、英語表現の特徴をよく表している。

The now-stalled Uruguay Round, the GATT-sponsored Uruguay Round, the on-going Uruguay Round のように冠詞 the の使用により概念を限定することができる。

now-stalled, GATT-sponsored, on-going といった形容詞での修飾を許している。英語表現の特徴の一つであらう。

C' Access の場合

既存語に新しい定義をもたせることは英語における語形成のもう一つの特徴である。

Access はコンピュータ用語として使用頻度の高い単語となった。元来、名詞用法のみであったこの単語が、動詞機能ももつようになってきていることから、使用頻度の高さが推測される。

ミニマムアクセスのように米をめぐる日米交渉での英語用語が暫定的訳語をつけてマスコミに出てきている。

#### D、増加しつつあるカタカナ語

本考察での対象語以外に、カタカナ書き語がかなりある。特に、対外交渉の中で使用された英語をカタカナ書きの注をつける傾向が増えてきた。

提案(オフアー)、要求(リクエスト)、保護水域を上げること(リバランシング)、一括審議する制度(ファースト・トラック)<sup>(5)</sup>、非公開会合(グリーンルーム会合)などである。

一方、事前点検(フォローアップ)のように訳語として定着していると思われるものにも逆にカタカナの括弧書きを付けているものもあり興味を引く。

#### E、今後の課題

用語を漢字熟語で規定する傾向は明治時代の産業立国化政策と不可分といえる。

技術用語に日常語を使用する英語とは対照的である。

この2つの言語の語法上の大きな相違は、英語既存単語に対しての新定義の出現とともに新たな日本語の定義を漢字で確立することになる。

むしろ、アセスメント、ラウンドが示すように適切なカタカナ書きの方が混乱がないであろう。

国際化とともに、英語既存語定義が多くなりカタカナ書きが増えることが予測される。カタカナ書き語のデータベース化により追跡調査を今後の課題とする。

注 (1) 同一記事内での用語は頻度を一回とした。

(2) 「見出し語」、「囲み記事」、「外来語・略語」を調査対象とした。

(3) 10項目が『翻訳語成立事情』の章建てとなっている。

(4) *The Americana Annual 1991*, p.285, p.558

(5) 「ファスト・トラック」もあり確定していない。

参考資料

Lawrence T. Lorimer, ed. *The Americana Annual 1991*, Danbury, CT: Grolier Ltd., 1991.

自由国民社版『現代用語の基礎知識』(自由国民社 1981-1991)

朝日新聞 『朝日新聞朝刊・夕刊』(朝日新聞社、平成2年10月-平成3年4月)

石綿 敏雄 『日本語のなかの外来語』岩波新書296 (岩波書店、1985)

上野 景福 『語形成』英文法シリーズ25 (研究社、1956)

中村雄二郎 『術語集—気になることば—』岩波新書276 (岩波書店、1984)

橋本 貞雄 『A Study of English Words—Portmanteau Words—』『横浜商大論集』第16巻第2号 (横浜商科大学、1983)

柳父 章 『翻訳語成立事情』岩波新書189 (岩波書店、1982)